

## エピソード

### 『スーダンの少女』

二〇三三年八月、ワールド・デイスパッチャーズ紙の表紙を飾った少女を、あの有名な写真を本紙読者諸氏は憶えておいでだろうか。母親の形見だという真つ青な絹のスカーフを頭にぐるりと巻き、小さな赤いビーズの耳飾りを一つだけ付けた十三歳のスーダン人少女。俯き加減で、琥珀色の深淵のような瞳が真つ直ぐにカメラを見つめていた、あの少女のことを。

あれから四十六年が経過し、五十九歳になった元少女が私の目の前に立っていた。精一杯背筋を伸ばしても、彼女の脊髄は真つ直ぐになることを拒んでいる。写真が世界に知れ渡った数週間後、少女はキリスト教会派である南スーダン軍から言語に尽くし難い暴行を受け、永遠に癒えぬ傷を脊髄に負った。

青いスカーフは平和の象徴であるとワールド・デイスパッチャーズ紙は書いた。青は二〇二八年の第三次南北スーダン戦争を集結に導いた偉人、北スーダンのハムザ師が掲げた旗の色である。海の青、空の青、地球の青。人々の心には大洋と同じ、一繋がりので地平が広がっているのだと説いたあの著名な詩人、ハムザ・イドリスである。

人は、宗教がなくては生きていけないものなのか。文明の開闢以来、数知れぬ宗教が興こり、そして消滅していった。私自身は無宗教だが、科学で説明出来ない事象はまだ多い。人の心の地平は、科学では計り切れないのだ。心の傷を科学は癒してくれるのか、という問いに、私は自信を持ってイエスとは言えない。宗教の存在理由は、人類が存続する限り消え去ることはない。だが、人の心に猜疑心を生み、他者を疎外し、迫害し、苦しめてきたのもまた宗教なのだ。科学も政治も宗教も、力を持ち、数の論理を身に付けた時点で同じものになる。他者を受け入れることを拒絶する絶対真理を、自ら構築した壁の中に設けてしまうのだ。そしてそれが、相対的なものに過ぎないことを忘れ去ってしまうのだ。未だ内戦の終結せぬスーダンで、かつての少女は私のカメラに満面の笑みで応えてくれた。私の撮影した彼女の写真の中で、最良の笑顔を掲載しようと思う。多くの皺を刻み込んだ彼女の美しい微笑みの奥には、到底掬い取ることの出来ない

い悲しみが沈んでいる。彼女はその不自由な身体で、大変な苦しみをもって三人の息子と二人の娘をもうけたが、内戦の世界で生き残ったのは一人の娘だけだと言う。幸いにしてその娘は村を出て大学まで進み、今はアメリカに留学しているという。はつきりとは分からないが、ヨーロッパ人の恋人がいるとのことだ。彼女は娘から届いた写真を、紙に包んで大事にしまっていた。私も自分のことのように嬉しく思い、心から祝いの言葉告げた。この紙面に掲載されている彼女の写真は、その時に撮影したものだ。私は再会の礼を告げ、村を後にした。

スーダンだけではない。今も宗教上の理由で、政治上の理由で内戦が続く国家の数は両手に余る。そして、その戦闘を継続させる為に武器を提供する文明国家が少なからず存在することを知らぬと言いつける大人はいないだろう。自らの手を汚さず、後に残る禍根や言葉に言い表せない数え切れぬ悲劇を振り返ることもせず、資本の海に溺れる真に汚れた富裕層の亡者たちよ、立ち止まり、考えてみるがいい。

文明は、微塵でも世界を豊かにしたのだろうか？ この四十六年で、世界は少しでも良くなったのだろうか？ 私は、世界中の人々に覚えていて欲しいのだ。決して忘れな

いでいて欲しいのだ。あなたの愛しい娘がコネクトに溺れ、現実と仮想現実の区別を自ら葬り去り、享楽こそが文化だと思い込もうとしている今この同じ瞬間に、彼の地では銃声の木霊から決して逃れることが出来ず、強盗とレイパーから逃れるために息を潜め、真つ暗闇に隠れて眠れない夜を何とかやり過ごそうと、せめて想像の中で大海原を泳いでいる少女達が数万人も存在しているということ。

(森池マサル)

母さんが書き遺してくれた父さんのことを、もう少しだけ書いておこうと思う。父さんの死後、もう一箇所、母さんのライフログ領域がアンロックされたのだ。これは母さんが、ジャーナリストになろうとしていた俺に向けて残した、世界の真実の一つだ。

肉体労働が人類の手を離れて久しいが、非人間的な工場労働はなくなっただけではない。ロボットはどんなに細やかな作業もこなすが、感情や創造性を伴う脳の労働は人間の領

域だ。ケンイチさんは一日中工場で頭にプラグを繋げられ、考え続けていた。何を考え  
ているのかは自分でも分からないそうだ。ただひたすらに、脳の回路を提供し続ける。  
その昔流行ったグリッドコンピューティングのように。今日も疲れ切つて帰宅するケン  
イチさんに、私は脳オイルを差し出す。ケンイチさんは仰向けに寝転がり、管を鼻に通  
す。ボトルのスイッチを入れると、気化した脳オイルがゆつくりと鼻から吸入される。  
いつものように、ケンイチさんは不快な表情を浮かべる。だがこれで、明日も脳が機能  
するのだ。生活のためとはいえ、こんな非人間的なことが許されて良いのだろうか？ 今  
夜も私は悪魔の片棒を担いでいる気分になり、気持ちが塞がる。可哀想なケンイチさ  
ん。いつか、この仕事を辞められる日が訪れるだろうか？

ケンイチさんは陸上競技で推薦入学した大学を怪我のために辞めてしまったから、こ  
んな環境でも働かざるを得なかった。今の時代は、途中リタイアした人間にはあまりに  
も厳しい。主だった労働行為はロボットに取って代わられ、高学歴や特殊な能力のない

人間に可能な労働はごく限られてしまっているのだ。

今日も蒼白い顔でケンイチさんが帰宅した。手が震えている。言葉も少ない。脳オイルを吸入すると、すぐに寝てしまった。明日の朝、ケンイチさんを起こすのが辛い。

脳オイルとは何なのだろう？ 脳に直接働く栄養剤、ということだが、何で出来ているのだろう。何故、脳労働者だけが必要とするのだろう。もしかしたら、ある種の麻薬なのではないか？

ブレインオイル。製造…サンumont社。米国よりの輸入品。原材料…動物性脂肪、コーン油、大豆蛋白、カルシウム。

ケンイチさんが工場を辞めてきた。退学して以来趣味で撮影を続けてきた陸上競技の写真が、有名なスポーツサイトに高額で買い取られたと言う。それだけでなく、契約フォトグラファーにならないかと、オフアーを受けたのだそうだ。競技者ならではの視点で、プロの写真家の表現を凌いでいるのだそうだと、嬉しそうに私を抱き上げた。そして私を見上げ、工場を辞めたことを告げた。私は絶句した。幼いマサルを抱えて、写真だけで食べていけるのだろうか。たった一度、写真を買い取られただけで、これからもずっと食べて行けるなどと、ナイーブに過ぎるのではないか。でも、それでもいい、ケンイチさんが幸せなら、私も幸せだ。生活なんてどうにでもなる。いざとなれば、私だってもっと働けるのだ。

私は会社を辞めた。ケンイチさんの収入は予想を遥かに上回っていたし、お金に困ることは全くなくなったのだ。何という幸せだろう。ケンイチさんは毎日笑顔で日本中を、そしてたまに世界中を飛び回り、私に愛情の籠ったメッセージを送ってくれる。国内にいる時は、どんなにそれが遠くでも可能な限り帰って来てくれる。私は一日掛けてケンイチさんとマサルのために料理を用意する。ケンイチさんの好きな料理は手間が掛からない。でも、中々素材が手に入らないのだ。私は関東近県を飛び回り、食材を用意する。こんな贅沢が許されて良いのだろうか？

ケンイチさんが、脳オイルの正体を突き止めた。スポーツの取材と平行して、密かにサンumont社を調べていたのだ。私にも内緒で。



主原料は動物の脳から抽出した脂質。馬や牛の脳らしい。そして、一日十時間じつとしていられるように、動作を緩慢にするための薬物が添加されている。恐らくはモルヒネの類いだという。ケンイチさんはこんなものを毎晩のように吸入させられていたのだ。仕事を辞められて本当に良かった。でも、今でも同じ労働を続けている何千もの人がいる。そして、廃人のようになって辞めていく人がいる。

シードは使い終わった脳オイルの缶を舐める。大好きなケンイチさんの匂いがするからなのか、オイルの匂いが好きなのかは分からない。猫の体に良くない成分があるかも知れないが、オイルスプレーの噴霧口ではなく、唇に当たっていた辺りを舐めていたようにも思える。ケンイチさんとの思い出を愛おしんでいるかのように、空き缶を抱いて眠るシードには、きつと、私の心も解っているのだ。

シードが連れていかれた時のことを、私は今でも忘れることが出来ない。顔のない役人達が私の腕の中から奪って行った時のことを。「シードは人間の食べ物を取ったりなんかしないわ、私の食べ物を減らしてもいい、だからシードを私達から奪わないで。あなた方にはただの仕事かも知れない、でも私達から家族を奪ったことを、私は絶対に忘れないから」

恐怖を感じて私にしがみつくシード。ケンイチさんとの思い出を共有したシードが、私の腕から引き剥がされて行った。私は役人に食らいについて繰り返し乞うた。お願い、お願い、お願い！と。

《脳オイル》、シードのブレインオイルを見て、父さんが複雑な表情をしていたっけ。真実を知った時、父さんはどうしたんだろう。サンumont社を告発しようと考えたのだろうか。いや、サンumont社はオイルを製造していただけだ。いくら非人間的な労働を強いられている労働者が多数いようと、オイルの製造元には何の責任もないのだろう。麻薬が含まれていたといっても、父さんは科学者でもなければ警察関係者でもない。実物を分析することは出来なかったろう。しかも、俺が何も知らないくらいの過去に、その種の脳労働は消滅し、脳オイルの存在も記録に残っていない。恥ずべき過去を、何者かがネットワークの記録から密かに消し去ったのだ。インターネットの時代なら、一旦拡散した情報は決して完全に消去することなど不可能だった。だが、ある意味統制されたコネクト・システムでは、それが可能なのだ。何事にも良い面と悪い面はあるもの。個人情報保護は保護され、誤って漏らした一言で、ある人間の一生が台無しになることもない。ネットワーク詐欺に引掛かる可能性も0に近付いたのだ。大方の市民は、時の政府に都合の悪い情報がいつの間にか消え去っていたとしても、気にも留めないのだから。

いずれにせよ、父さんやかつての同僚達は、記憶の奥底に事実を沈めたまま時を重ね

た。きつとこのまま、この過去は忘れ去られて行くのだろう。俺がやったことと同じだ。俺はあれ程の思いをして真実に迫った。だが、その真実を世界に伝えることは出来なかった。それは、世界の安定のためか？ アメリカの安定のためか？ 結局のところ、お偉いさんがするのと同じ判断を、ワールド・デイスパッチャーズ紙は下したのだ。

ウイルの言うように、『これが最良の結果なんだ』と思うことは出来なかった。俺は、これで良かったんだ、と自分に言い聞かせ、真実を胸に抱えたまま父さんのように生きて行くのだ。

《性格…猫型》カタログにはそう書いてあったが、ロボットに性格などあるのだろうか。明日、介護兼ペットロボットが我が家に来る。マサルも気に入れば良いが……。

ブレインオイルの缶を見て、ロボットがニャーと言った。初めは気味が悪いと思ったが、いつの間にか、何だか本当に猫がいるようにも思えて来た。世間ではロボットに名前など付けるものだろうか、どうしてか、このロボットがシードの生まれ変わりのような気がしてならなかったのだ。シードと名付けたら、ケンイチさんは怒るだろうか？なぜかブレインオイルの空き缶を取って置きたがる変なロボットのことを。

「おーい、マサル、そこにいるのかー？」

ジェイクの聲がリビングに響いた。若い時のままの姿がディスプレイに現れた。

「よう、ジェイク。相変わらず元気そうじゃないか。美味しいものを食ってるのか？」

「まあな。食生活はガラッと変えたんだが、どうやらもう手遅れらしい。だが、せめて残された時間を元気に過ごさないと、人生がもつたいないからな」

「ああ、悪かった。そんなつもりで言ったんじゃないかな。そんなに、悪いのか？」

「いや、冗談だ。俺は殺しても死なないよ。それに、毎日美味しい飯を食って、少し若返った気もするぜ。それよりな、マサル。お前に紹介したい人がいるんだ」

「ほう、結婚でもするのかわ？」

「ははっ、今更それはないね。俺は今な、イタリアにいるんだ」

「あれ以来ずっと、か？」

「ああ、お前には是非紹介したい日本人がいる」

「まさ、か……？」

「さあ、どうぞこちらへ」

ディスプレイにはスマカではなく、中年の紳士が映った。左肩から先を失っているが、健康そうな顔色で微笑んでいる。

「こっちの病院で出会った下田氏だ」

「初めまして、下田です。あなたの噂はジェイクさんから聞いていますよ」

「はい、初めまして。森池です」

「分かるか？ 俺の謎掛けが」

ジェイクがにやりと笑った。下田氏がジェイクに笑いかけ、言った。

「森池さん、私ね、生存記録がないんですよ。あの戦闘に巻き込まれてこいつを失ったお陰でね」

下田氏がもはやそこには存在しない自分の左上腕をトントンと叩く振りをした。

「エミツプを、失った……？」

「そうだ、マサル。分かっただろう？ こっちにはな、生存記録のない怪我人がごまんといる。どこのサーチにも掛からず、死んだ事になっている行方不明者がな」

「そうか……。じゃあ、」

「そうだ」

それだけ言うとジェイクはにこりと笑って黙り込んだ。下田氏は会釈をしてディスプレイの外へ去って行った。俺は通信を切ると、全ての機器の電源を落とした。カーテンの隙間から、沈みかけたオレンジ色の夕陽が細く射し込んでいた。俺はふと、グラマン邸のダイニングルームを思い出していた。そして、ごく即物的にバチカンの爆発とスミカの身の危険を告げたグラマンのあの目を。陽射しはデスクの上をゆつくりと横切りながら、やがてすつと消えた。

スミカが、イタリアのどこかで生きているかも知れない！ 今の俺にはそれだけで充

分だった。もしかしたらスミカが、生きているかも知れないのだから！

ここで一旦、グラマン氏病とロボット戦争に関する物語を終えようと思う。またいつか、俺の脳ミソの中でフツフツと発酵した何かが浮き上がってきたら、その時はまた改めて俺の話聞いてみてくれないか？

〈完〉